工芸

Kanazawa Traditional Arts & Crafts

WINTER
2004
Vol.3

特集

伝統工芸が彩る
金沢冬の情緒

清々しく、潔く。金沢の冬の暮らしを彩る伝統工芸の数々。

金沢の伝統的工芸品

加賀友禅／金沢九谷
金沢仏壇／金沢箔
金沢漆器／加賀繍
希少伝統工芸

金沢の風土が育んだ伝統工芸の数々に、想いを寄せて

金沢伝統工芸いまむかし

御細工所と百工比照

「波丸紋散銚」

工芸技術の奨励、振興に心を砕いた加賀藩五代藩主、前田綱紀は元禄元年（一六八八年）、諸国の名工を招き、それまでの武具や武器の補修修理にあたっていた「御細工所」を、さらに調度品の製作を行う場として整備・拡充しました。

また、綱紀は全国から著名な学者や芸術家を招き、加賀百万石に学術、美術の花を咲かせました。今日の工芸美術王国としての石川県の礎は、綱紀の時代に築かれたと言っても過言ではありません。

御細工所では優れた技能を持つ技術者や職人を町人からも登用し、蒔絵・漆工芸・象嵌・刀鍛冶など二十四の職に分けて、大名調度などを製作させていました。

さらに綱紀は全国各地から優れた工芸品を多数収集するとともに、その分類にも熱心でした。それが現在、前田育徳会尊経閣文庫に残る一大工芸コレクション「百工比照」です。「百工」とは諸種の工芸、「比照」とは比較対照を指し、日本近世の工芸技術研究に欠かせない貴重な資料となっています。 現在の石川県でも、歴代藩主が美術工芸を推奨してきた歴史が受け継がれ、数々の伝統工芸・文化が暮らしの中に息づいています。

前田育徳会所蔵　金沢城絵図「堂形の御細工所」

INDEX

■特集　伝統工芸が彩る
③「金沢 冬の情緒」

⑦ 加賀友禅
生きとし生けるものの、鮮やかな色を

⑨ 金沢九谷
伝統の金沢九谷が見せる、新しい顔

⑪ 金沢仏壇
華燭の日を見守る、荘厳な輝き

⑬ 金沢箔
現代の室礼に華を添える、金箔の煌き

⑮ 金沢漆器
ハレの日を彩る、加賀蒔絵の麗容

⑰ 加賀繍
加賀繍と加賀友禅の出会いが生む新たな工芸の世界

⑲ 希少伝統工芸
琴　芸どころ金沢に息づく音の文化
象嵌　今を彩る、百万石の装飾美

㉑ 金沢伝統工芸ショップガイド
お気に入りの逸品を選ぶ時間をゆっくり、楽しむ旅の折に訪れたい、伝統工芸のショップガイド

特集

伝統工芸が彩る

金沢冬の情緒

清々しく、潔く。金沢の冬の暮らしを彩る伝統工芸の数々。

小雪が舞う冬の情景が最も美しいとされる金沢。
この街には、長い冬を楽しむ文化・風習が息づいています。

雪の季節、夜の金沢はさまざまな光に包まれます。武蔵ヶ辻では雪吊りのモニュメントに雪の結晶の形をした金箔をあしらいライトアップする「金箔きらら」が行き交う人の足を止めます。県下随一の繁華街香林坊でも、国道沿いの街路樹をイルミネーションが飾ります。

年が明けて「寒の入り」。犀川敷では勇壮な「加賀鳶出初め式」が繰り広げられます。江戸時代の加賀鳶の伝統を継ぐ消防団の出初め式で、寒風の中での裸放水とハシゴ登りに大きな歓声がわきます。この頃、県立歴史博物館では「新春を祝う」と題した企画展が開かれ、申年の吉祥をテーマにした美術工芸品などが多数展示されます。

古都金沢では、しきたりや習慣を尊重し、お正月の料理やおもてなしにも気を配ります。華やかな加賀友禅を纏い、加賀繍を施した包みを携えた女性が目をひくのもこの頃。お客様を迎える際には、料理や菓子、酒を厳選することはもちろん、器も金沢九谷や金沢漆器などの逸品を用意します。新春のお茶会や芸事の披露などの折りにも、心をこめたお祝いのやり取りをします。

雪が降りしきり、寒さが最も厳しくなる「大寒」。加賀友禅で糊を洗い流す工程にあたる「友禅流し」は、寒中に行うのが特に良く、浅野川の清冽な流れの中で美しい友禅模様が泳ぐ様子が見られることもあります。

立春の前夜は「節分」。この日、柊の枝に鰯の頭を刺したものを戸口に立て、豆をまき、新年の無病息災を祈る伝統があります。神社や一部の寺院などでは、豆まきをして立春を迎えます。

めいてつエムザ前設置
（11月中旬〜2月下旬）
「金箔きらら」
提供：石川県箔商工業協同組合

食は金沢の冬の大きな楽しみのひとつ。二月には石川の食文化と風土を満喫する恒例イベント「フードピア金沢」が行われます。各界の多彩なゲストを囲んでの「食談」、芸妓のお座敷芸が楽しめる「兼六園雪見宴会」、家族やグループで気軽に楽しめる「フードピアランド」など、冬の金沢の食文化が存分に味わえる行事が満載です。

釈尊入滅の忌日である二月十五日、真言宗、曹洞宗の寺院では「涅槃会」が行われ、涅槃像をかかげて供養を行った後、参拝者に涅槃団子が撒かれます。現代的な街の姿とは異なる、仏教の深いつながりを持った古の金沢の精神を知ることができます。

やがて、やわらかな日差しに冷たい雪や氷も解け、春の気配が感じられる「雨水」を迎えます。雪国に訪れる春の足音に、人々は胸ときめかせます。

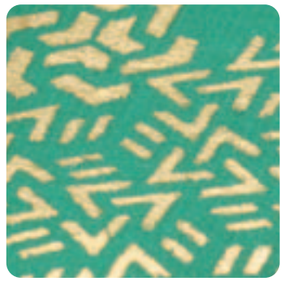
●金箔きらら……十一月中旬～二月下旬
●香林坊地区ツリーファンタジー
十一月上旬～二月下旬
●石川県立歴史博物館「企画展 新春を祝う」
一月四日～二月一日
●加賀鳶出初め式……一月十一日
●フードピア金沢……二月十三日～十五日
※大　寒……一月二十一日
節　分……二月三日
立　春……二月四日
雨　水……二月十九日

伝統工芸品における冬の意匠

松 ●まつ

古くから吉祥紋として使われている松竹梅。「松」は風雪に耐え、厳寒にも緑を保つため、節操高きものの象徴とされてきました。神仙思想と結合して長寿の意味にも用いられています。

雪 ●ゆき

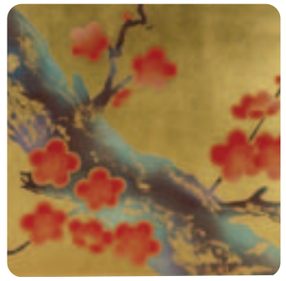


花と月とともに日本の代表的景物。六角形の結晶を図案化した雪輪文をはじめ、その表現はさまざまです。大雪は豊作の前兆とされ、縁起の良いものとして好まれます。

花車 ●はなぐるま

「花車」は四季の草花を盛り込んだ籠を積んだ車の文様。花で飾った御所車の文様も花車と呼ばれます。その華やかで気品のある美しさから、ハレの日の友禅に最も好まれる文様のひとつです。

梅 ●うめ



四君子の一つに数えられる「梅」。厳寒期に花を咲かせることから、強い忍耐力と清らかな気高い美しさを表します。日本では平安時代以降、新年の希望の象徴として詩や歌にも詠まれています。

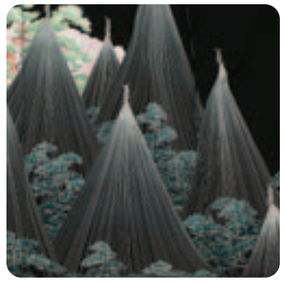
水仙 ●すいせん

一月から二月にかけて可憐な花を咲かせる水仙は、新年を迎えた頃に満開を迎えることから、新春の瑞兆花とされます。また水仙の仙は天仙の仙とも言われ、吉祥花として愛されています。

椿 ●つばき

早春に鮮やかな紅の花を咲かせる椿。春を告げる聖なる花とされる反面、ぽとりと花を落とすので武家では避けられてきました。それでもその華やかさや緑の葉とのコントラストの美しさから、さまざまな工芸品に描かれています。

雪吊り ●ゆきつり



立ち木を雪から保護するために枝を縄で吊る「雪吊り」は冬の兼六園の風物詩。円錐形の美しい幾何学模様は、金沢ならではの文様としてさまざまな工芸品に表されています。

鶴 ●つる

中国では鶴は長寿を象徴する瑞鳥として尊ばれています。その姿の優雅さは日本で特に愛されています。丸鶴文、菱鶴文、向かい鶴など文様のバリエーションもさまざまです。

加賀友禅

真っ白な生地の上に、花鳥風月やさまざまなモチーフを描き出す彩色は、加賀友禅の工程の中心となる作業で、華やかなイメージのある反面、もっとも技術と、根気が必要とされる工程です。加賀友禅の彩色の特徴的な技法として「虫食い」と「先ぼかし」があります。虫食いは〝わくらば（病葉）〟の美を表すもので、点を打ち図柄に三色ぼかしを配します。先ぼかしは、花びらや葉のぼかしを入れる際、外から内に向かってぼかしを入れていく手法です。

職人は色がにじまぬよう、生地の裏から弱い熱を当てて、乾かしながら筆や刷毛で手早く色を差していきます。刺繍や箔置きなどの染色後の後加工が少ない加賀友禅は、「染めのこころが生きている」と言われます。

金沢には金沢らしい「色」があります。加賀友禅の彩色は、臙脂・黄土・藍・草・古代紫の加賀五彩が基調となっていると言われていますが、それは必ずしも形式的なものではなく、金沢の気候風土の中でもっとも美しく映える色なのです。

それはかつて華燭の日を飾った友禅染めの「花嫁のれん」にも卓越した染めの技術を見ることができます。

加賀友禅の製作工程

意匠設計 ◀ 仮仕立て ◀ 下絵 ◀ 糊置き ◀ 地入れ ◀ 彩色 ◀ 下蒸し ◀ 中埋め ◀ 地染め ◀ 本蒸し ◀ 水洗い ◀ 湯のし ◀ 上加工 ◀ 染色補正 ◀ 仮仕立て

匠の技

柿本 市郎 氏
かきもと いちろう

県立工業高校を卒業後、加賀友禅金丸工房にて、人間国宝木村雨山氏、能川光陽氏の指導を受ける。加賀友禅新作発表会 石川県知事賞、伝統加賀友禅工芸展 金賞、加賀友禅新作競技会 中部通商産業局長賞など受賞多数。平成七年伝統工芸士に認定。加賀友禅に対する深い愛情が秀逸な作品を生み出す。「友禅作家として、お客さんに喜んでもらえる着物を作ることが基本です」。

花嫁のれん

伝統的な金沢の婚礼で用いられる「花嫁のれん」は、宝船、鳳凰などの吉祥模様と新婦の実家の家紋が染められた友禅のれんで、花嫁にのれんの様に柔順であってほしいとの願いが込められています。婚礼の日、花嫁は白無垢に着替えてこののれんをくぐり、仏壇参りを行います。その後は一、二年正月や祝事のときに飾られるだけという、大変贅沢なのれんです。

押田家所蔵 押田 正義作「花嫁のれん」

日本における代表的な吉祥紋、松と梅を配置した格調高い訪問着。
柿本 市郎作 訪問着「松韻」（加賀染振興協会）

神秘的な自然現象を通して、
春の訪れを待つ心を表現した訪問着。
杉浦 伸作 訪問着「オーロラ」（加賀染振興協会）

名勝兼六園の冬の風物詩、
雪吊りを表現した金沢風情あふれる黒留袖。
矢田 秀樹作 黒留袖「兼六園・梅林」（加賀染振興協会）

撮影協力:壽屋／衣裳協力:ブライダルハウスことぶき

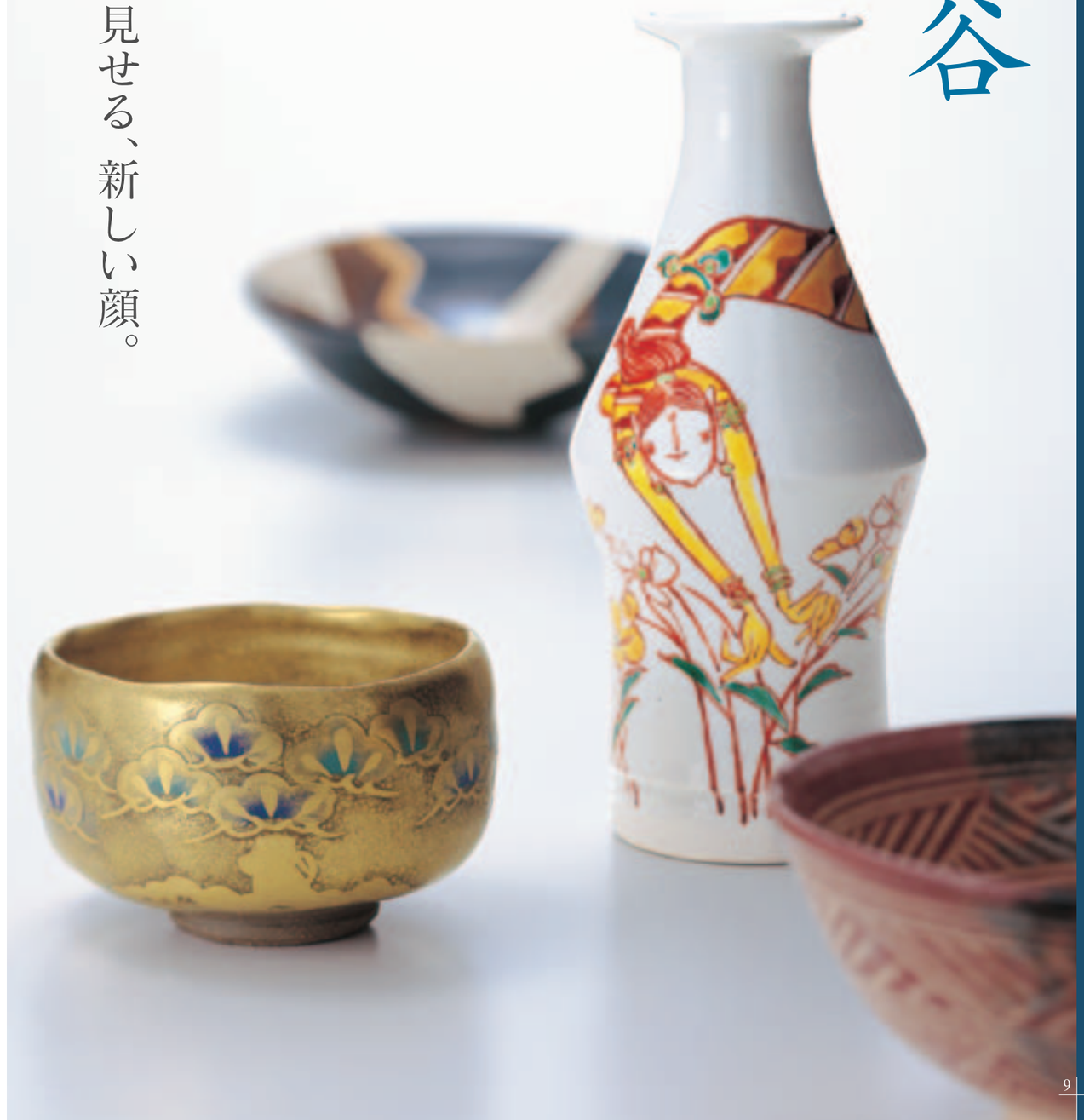
金沢九谷

伝統の金沢九谷が見せる、新しい顔。

緑、黄、赤、紫、紺青の五彩で彩られた九谷焼の華麗な色絵の世界は、長い冬、雪が降り積もり白一色に閉ざされる金沢の気候風土から追求されたものと言われています。

過去の歴史を振り返ってみれば、九谷焼は古九谷から再興九谷に至るまで、それぞれ特徴ある画風を創り出してきました。約三三〇年前、絵画的で豪快な魅力を持つ古九谷に始まり、赤を施し中国風の絵柄の木米（約一八〇年前）、地紋で全体を塗りつぶした吉田屋（約一六五年前）、精密な人物の周りを小紋などで埋めつくし、金彩を加えた飯田屋（約一五〇年前）、洋絵具を用いた絢爛豪華な色絵が特徴の庄三（約一三五年前）、京焼金襴手手法で前面を赤で下塗りし、その上に金のみで彩色する永楽（約一二〇年前）まで。それぞれの時代の風潮や人々の好みに合わせて柔軟に変化を遂げたということも、九谷焼のひとつの魅力ではないでしょうか。

そしてモノや映像メディアを通して周囲に多種多様な色があふれる今、素朴で心和む色を好む消費者のトレンドに合わせて、金沢九谷も新たな変貌を遂げています。



時代の流れとともに変化してきたきわめて柔軟性のある陶芸、金沢九谷。現代においてはどのような作品が生まれているのでしょうか。

その大きな特徴は、生活者としての使い手を意識しているということにあります。ライフスタイルの変化にともなって、単に鑑賞する器よりも、日常生活に使いたいと思う器のニーズが高まっているのです。現代の金沢九谷の作家は、伝統的な技術を源流に持ちながらも、さまざまな陶芸のエッセンスを取り込み、現代のライフスタイルに語りかける器を製作しています。

これらはすべて、金沢九谷振興協同組合に所属する陶芸作家の作品です。伝統的な金沢九谷の色絵の流れを汲む茶器、土のそのものの風合いを活かした素朴な鉢、フォルムの美しさを追求した斬新な器、現代のインテリアと調和するモダンな画風の作品など、それぞれは色絵も、形状も、釉薬の使い方もさまざま。従来の九谷というカテゴリーを超えて、作家個人の個性やセンスが十分に表現されているといえるでしょう。

柔軟に変化し続ける金沢九谷、そこには常に何か新鮮な発見があるのです。

長谷川 塑人「白磁色絵妖精文長花入」*Sojin Hasegawa*

赤で妖精を描き、黄釉（もえぎ）で彩色した花器。艶やかさと清楚さを兼備する妖精など、独特の図案化表現に豊かな遊びごころが感じられる。

佐藤　剛「カニ飯碗」*Tsuyoshi Sato*

800℃の素焼きの後に、白化粧土、紅柄、織部釉、長石釉を筆で施釉（筆塗り）し、1250℃で本焼き。酸化焼成によって得られたモダンな色合いが特徴的。

南保　健「もも皿」*Ken Nanbo*

白い土に顔料を混ぜて色土をつくり、白い土と合わせて模様を出す「練り込み」技法による器。優しい風合いと、一つひとつ微妙に異なる表情が味わい深い。

能瀬 萌春「茶盌さくら」*Houshun Nose*

赤、黄、緑、紫、紺青の九谷五彩の色絵を基調とし、春らしく金を上品にあしらった茶道具。桜の図案が愛らしく、初春の茶会に華やかさを添える。

長谷川 健一「金彩 松 茶盌」*Kenichi Hasegawa*

吉祥紋である松を「盛金」で描いた茶器は、繊細かつ豪華絢爛。盛金は金彩加工のひとつで、刺繍のように盛り上がり立体感を表現する技法。

泉　富美「大樋赤彫三島菓子鉢」*Fumi Izumi*

ロクロ成型、化粧がけ、彫り、上釉、焼成の工程を経て完成する大樋焼の鉢。高麗茶碗の「彫三島」の手法を用い、釘彫りで桧垣文を施している。薄鼠色は窯変も楽しい。

木越　勲「焼〆金彩鉢」*Isao Kigoshi*

釉薬をかけずに焼き上げる「焼きしめ」。土そのものの重厚でありつつも素朴な風合いが生きる焼きしめの器に、金箔を施し、九谷の和絵具を焼き付けてある。

徳村　達「掛分け鉢」*Toru Tokumura*

天目釉、籾灰釉、飴釉、三種類の色の異なる釉薬を用いた「掛分け」技法による器。色合いの妙と、直線と三角を基調にした図柄の美しさが際立つ。

村本 外茂樹「赤絵六寸鉢」*Tomoki Muramoto*

生地から絵付けまですべて作家の手によるもので、手挽きの六寸の鉢に赤絵を施し、中心に色絵で花を描いたもので、用の美にあふれる作品。

岡　重利「青瓷水指」*Shigetoshi Oka*

青瓷の淡い青緑が、気品ある奥深い輝きを放つ水指。蓋はガラス作家の佐々木雅浩氏によるもので、陶器とガラスのコラボレーションを体現した作品。

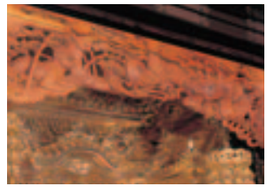
金沢仏壇

金沢仏壇の製作工程には、塗加工や箔押しを施した彫刻を作る「箔彫（はくぼり）」と、木肌を見せる前指や障子の上腰、中腰、下腰を作る「木地彫（きじぼり）」とふたつの彫刻工程があります。

天女、雲、龍、梅に鶯―。荘厳な金沢仏壇にふさわしい彫刻を、職人は日本画から着想を得て図案を描き、そこから三次元の彫刻の世界を導き出します。彫刻に使われる木は、タブ、櫟、柘植、桑、白檀、黒檀など。原木を製材し、風通しのよい日陰でゆっくりと自然乾燥させますが、この乾燥には五年以上もの月日が必要とされます。おおよその立体的なフォルムを作る荒彫りの工程を経て、モチーフには釣り合いを考えた細かな変化が付けられていきます。

彫刻に使われるノミや彫刻刀は数十種類にのぼります。職人は木の質、作業の内容により、その作業を止めることなく、リズミカルに道具を持ち替え使い分けていきます。

一彫り一彫りに精魂を込める仏壇彫刻は、木に生き生きとした命を吹き込み、絢爛豪華な金沢仏壇の精神性を高めているのです。



匠の技

林 利一 氏
はやし としかず

県立工業高校デザイン科を卒業、家業の仏壇彫刻を継ぎ、三代目となる。現在、金沢市寺町の工房で仏壇店を営みつつ、四代目を目指す長男とともに鑿をふるう。その確かな技は誰もが認めるところだが、本人はさらなる高みを目指し、「江戸時代の日本画の迫力を彫刻で再現したい」と言う。木そのものの美しさを活かした茶杓など、遊び心のある作品の製作にも意欲的。

仏壇参り

伝統的な金沢の婚礼では、婚家で「仏壇参り」と呼ばれる儀式が行われています。これは、婚家の仏壇にお参りし、家族の一員になることをご先祖に報告するというもの。花嫁は身も心も、生まれた時の様に清らかにという意味から白無垢に着替え、花婿の親族の子供か親戚の婦人に手を引かれ、花嫁のれんをくぐり、両親と仲人が同席し、仏壇参りを行った後に、花嫁は式場へ向かう運びとなります。仏教が人々の生活に深く浸透していた昔を物語るしきたりです。

からくり仏壇

二〇〇四年一月、金沢仏壇「七十代からくり仏壇二号」が完成します。この仏壇は、歌舞伎役者の高麗屋 松本幸四郎が演じる勧進帳の弁慶を描いた蒔絵と、名匠 左甚五郎の琵琶湖の龍伝説を題材にした迫力ある龍の彫刻が特長。歌舞伎を仏壇に描くのは初の試みで、さらに龍は首が動くしかけになっているとあって、その完成が心待ちにされています。

詳しくはホームページをご覧ください。
http://www.kanazawa-butsudan.or.jp/

室町文化の伝統と高度な技を純粋に受継ぎ表現されたお仏壇。第17回全国伝統工芸品仏壇仏具展で全国伝統的工芸品仏壇仏具組合連合会会長賞受賞。
50代 小型金沢仏壇本三方開
（W67cm×H147cm×D57cm）
（㈱塗師岡仏壇店）

昔から受け継がれた漆の気品と奥深い光沢、純金箔の華やかな美しさ、加賀蒔絵の優美さ、彫刻の重厚さを結集させた金沢仏壇。
70代 金沢仏壇新三方開
（W72cm×H161cm×D64cm）
（卯野屋仏壇店）

金沢仏壇の製作工程

木地製造 ◀ 宮殿製造 ◀ 箔彫製造 ◀ 木地彫製造 ◀ 金具製造 ◀ 漆加工 ◀ 蒔絵 ◀ 呂色 ◀ 箔押 ◀ 組立

200代下段本三方開（金沢仏壇商工業協同組合）
撮影協力：米永仏壇／衣裳協力：ブライダルハウスことぶき

金沢箔

現代の室礼に華を添える、金箔の煌き。

手前より
「本松屠蘇器」（金銀箔工芸 さくだ）
「ちょうちん椀＜二客揃＞」（箔一本店 箔巧館）
「盃 ＜山茶花＞」「盃 ＜椿＞」（箔座）

日本には、お正月、節分、雛祭りなど、四季折々の美しい習慣や行事があります。「室礼（しつらい）」は、そうした一年の節目、あるいは人生の節目に、人々の営みを支えるものに感謝を捧げる生活文化です。もともと調度をその場にふさわしく設えることでしたが、時代の変化とともに儀礼的な意味合いが濃くなりました。不老長寿を意味するとして尊ばれた「金」は特に室礼に好まれました。

西洋的なライフスタイルが浸透した今、人々が暮らしの中で室礼を意識することは少ないかもしれません。しかし金沢箔の上品な華やかさや、季節の意匠を取り入れて場を演出するセンスには、今に活かしたい室礼の提案を見ることができます。

加賀藩の工芸振興策により大きな発展を遂げ、今や全国生産の約99%のシェアを占める金沢箔は、美術工芸品はもとより、室内調度や小物の装飾にも使われています。

特別な日を彩る小物や、すこしだけ贅沢な日常品として。あるいは暮らしや空間を飾るアートとして―。金沢箔の煌きは、和の伝統のアイデンティティーを感じさせてくれるとともに、おしゃれでモダンな暮らしを演出しています。

【製品・製法特許取得済】
独自製法により、わずか0.1ミクロンの純金箔上に艶消と光沢の凹凸を実現。純金のコントラストのみで絵柄を表現した高級感が魅力。
上：「アート箔 額装＜純金箔＞」
下：「アート箔 額装＜プラチナ箔＞」
（かなざわカタニ）

左：ポケット式となっているので貴重な写真を大切に保存出来る。
「舞鶴 姫 アルバム」
右：「純金箔栞（しおり）」（金箔工芸 田じま）

左から：皮に箔をちらした丸いフォルムのシックな時計。「レザー丸時計」
柄の入った箔と蒔絵を施した祝儀扇は、ワンランク上のお洒落な小物。「祝儀扇」
扇子だけでなく、櫛やペンなど入れても素敵。布に箔をあしらい、上品な仕上りに。「差し袋」
（箔一本店 箔巧館）

左：蓋部を純金箔張りで仕上げ、冬の季節の花である椿を手描きで表現。蓋内側には鏡がついている。
「ジュエリーボックス＜椿＞」
右：布地に純金箔で雪の結晶を表現。片方が拡大鏡になっている2面鏡なので便利。布ケースつき。
「ダブルコンパクトミラー」（箔座）

左：静謐な冬の世界の広がりを感じさせる花器は、お部屋に清冽な雰囲気を呼び込み、使うほどに愛着がわく。
「詩景色花瓶 冬」
右：黄金の輝きが祝いの席にさりげない豪華さと気品を齎し、華やかな場をいっそう盛り立てる。
「扇面花生 よろこび」（金銀箔工芸 さくだ）

金沢箔の製作工程

金合わせ ◀ 延金 ◀ 紙仕込 ◀ 澄打ち ◀ 仕立て ◀ 引き入れ ◀ 打ち前 ◀ 渡し仕事 ◀ 抜き仕事 ◀ 箔移し

匠の技

丸岡 健氏（まるおか たけし）

昭和十五年生まれ。伝統工芸士。父親の跡を継いで昭和四十六年より「上澄」の世界に入る。1300℃の熱で金合金の地金を作る「金合わせ」の工程から、これを帯状にする「延金」の作業を経て、「打ち延ばし」工程を数回重ね、千分の三ミリの薄さの「上澄」と呼ばれる状態を仕上げるのが上澄の仕事。打上った澄をすばやく的確に三つ折りにしていく仕立て作業は、まさに熟練の職人技。

金箔の種類

純金箔と呼ばれる箔には、主な種類として合金率の違いから「純金箔K24」「五毛色」「一号色」「二号色」「三号色」「四号色」、金とプラチナの合金である「純金プラチナ箔」、艶消しの「絹」、模様を施した「アート箔」があります。「梅色」「三歩色」「定色」と呼ばれる金箔もあり、さらに製法によってそれぞれ「縁付」と「断切」の二種類に分けられます。

ひとことで金といっても、種類によって赤味を帯びたもの、青味のあるものなど、その表情はさまざまで、用途によって繊細な使い分けがなされています。

金沢漆器

ハレの日を彩る、加賀蒔絵の麗容。

手前より「鳳凰蒔絵盃洗」「松竹梅蒔絵燗鍋」「蒔絵宝尽 三ッ組盃」（すべて加賀蒔絵）

酌み交わす酒、通う心―。

日本では古くから、神聖な酒をひとつの盃で交わすことにより心と心が固く結ばれると考えられていました。そのため酒宴の席に用いる器は、人と人とのかけはしとなる、非常に意味深いものとして大切に扱われました。

「燗鍋（かんなべ）」もそうした器のひとつで、燗酒を供する際に使うもの。中でも格調高い加賀蒔絵の吉祥文などをあしらったものが珍重されました。

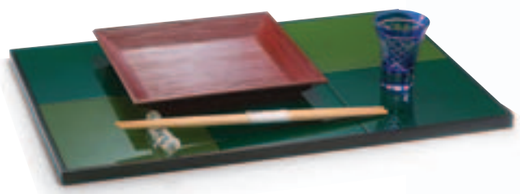
やがて客人をもてなす席では盃の献酬が礼儀とされるようになり、江戸後期に入ると取り交わす盃を清めるための盃洗（＝杯洗はいせん）が現れます。以降明治にかけて、盃洗としての機能美と装飾美を備えた漆器や焼物が多数作られました。

職人が魂を込めて作った燗鍋や盃洗は、祝いの席で主の心意気を示し、膝を並べる人々の心を華やかに浮き立たせます。燗鍋から酒を注ぎ、互いに酌み交わすことで、人々はハレの日のひとときを共有します。そこにはもてなす人ともてなされる人の、あるいは作り手と使い手の「共感」の世界が広がります。

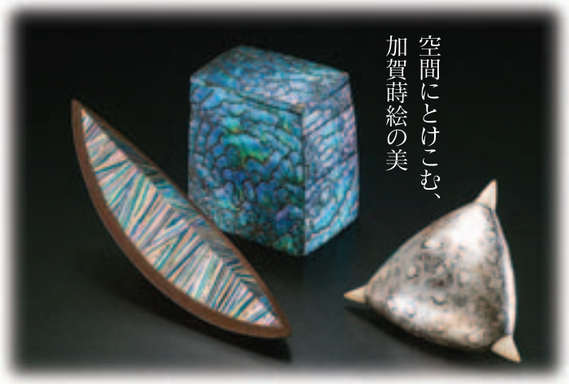
普段の使い勝手ばかりが重視される昨今ですが、毎日の食事に使われる器だけでなく、一年に一度、あるいは一生に数度、特別な日に使う器も豊かな「使い勝手」をわきまえた器なのです。

日本の文化が昇華、凝縮されたこれらの器、そして加賀蒔絵は、時を越えて人々に日本人のもてなしの心とその美意識を伝え語ろうとしています。

上：「ヘレンド 長安の春 楕円カップ」　下：「波紋筋丸盆」（能作）



上：「ヘギ目溜塗四方盆」　下：「敷板盆6枚組」（能作）



空間にとけこむ、加賀蒔絵の美

螺鈿の技法を用いたオブジェは、空間を飾るという用途と、アートとしての美しさを兼ね備えています。今、金沢漆器の技法は、器というカテゴリーを飛び出して変貌を遂げ、和と洋、伝統とモダンの間を自由に行き来しようとしています。　中央：「香合」／左右：「オーナメント」（いずれも山村 慎哉作）

中：「九谷焼瓔珞紋」　外：「朱縁高重」（能作）

卵殻

金沢漆器は蒔絵をはじめとする多様な技術の集大成と位置づけられます。加飾技術のひとつである「卵殻」は鶉や鶏の卵を細かく砕き、破片を貼りつける技法。卵殻の大小や置き方によって、平面的な表現にとどまらず、量感や遠近感、ぼかしなどの繊細で複雑な表現が可能となります。卵殻技術において独自の境地を開拓した金沢出身の蒔絵師寺井直次氏は昭和六十年に人間国宝に認定されました。

福田 浩康作「飛翔棗」

金沢漆器の製作工程

木地 ◀ 布張り ◀ 下地 ◀ 塗り ◀ 蒔絵

匠の技

福田 浩康氏
ふくだ ひろやす

ものづくりへの熱い思いから蒔絵師を志す。金沢美術工芸大学漆工科聴講生を経て、昭和四十七年初代清瀬一光氏の門を叩く。昭和五十八年には人間国宝寺井直次氏に学ぶ。昭和六十二年「日本伝統工芸展」に入選。以来数々の工芸展で入選。現在、金沢市長町の工房で次女と共に伝統の技を守りつつさらなる技術研鑽に励む。「ゆっくりと時間をかけて良いものを創ること」がモットー。日本工芸会正会員。

加賀繍

刺繍は古くは「繍い仏」と呼ばれ、仏の姿を描く方法として大陸からもたらされました。金沢にも室町時代に仏教とともに技術が伝わり加賀繍として定着、仏前の打敷や僧侶の袈裟を飾りました。江戸時代には染模様の文様をより際立たせるために刺繍が施されるようになりましたが、近代、特に第二次世界大戦後になると刺繍と友禅は別の流れとして発達しました。

しかし今、古い時代の作品の修復を通して、ふたたび加賀繍と加賀友禅のコラボレーションに注目が集まっています。

その代表例が「白紋繻子地水仙唐花丸紋模様繍小袖」の復元(模写)です。この小袖は徳川幕府三代将軍秀忠の二女の珠姫が、一六〇一年に加賀藩三代藩主利常の妻として前田家に輿入れする際に携えてきたもの。復元にあたっては金沢美術工芸大学の監修のもと、両業界の職人が製作にあたりました。バランスよく配置された二十二の花束は繍と友禅の手法を交えて仕上げられ、お互いにその美を引き立て合っています。

加賀繍の立体感と光沢、加賀友禅の写実的、絵画的な表現が融合することで、復元のみならず、手仕事でのみ創りあげることができる魅力あふれるアート・クラフトが生まれていくと期待されています。

「白紋繻子地水仙唐花丸紋模様繍小袖」復元品
(所蔵・撮影協力:金沢市)

加賀繍が醸し出す立体感と、加賀友禅の精緻な写実性が融合し、一幅の絵のように見える作品となっている。額装「猪苗代湖の想い出」(加賀刺繍協同組合)

加賀繍の製作工程

草稿 ◀ 下絵描き ◀ 糸染め ◀ 配色 ◀ 生地張り ◀ 糸巻き ◀ 糸縒り ◀ 繍い加工 ◀ 仕上げ

匠の技

庄司 静子 氏
しょうじ しずこ

加賀繍伝統工芸士。六十四年に技術習得のため小林刺繍舗に入門、以来四十年以上に渡って技術研鑽に励む。九十四年第十九回石川県伝統産業功労者表彰を受賞。近年は後継者育成にも尽力している。加賀友禅の鶴見氏との共同作業で、「水仙唐花丸紋模様繍小袖」「でか山前幕」の復元に携わる等、友禅との「コラボレート作品にも積極的に取り組んでいる。「野の花や草木の自然なグラデーションに繍の着想を得ることが多いですね」。

匠の技

加賀友禅作家
鶴見 保次 氏
つるみ やすつぐ

加賀友禅伝統工芸士。加賀藩御用達染物業大郎田屋家督、鶴見太吉郎の孫として生まれる。金沢美術工芸大学の日本画家の下村正一教授に師事。七十六年に金沢市工芸展に初入選して以来、受賞多数。現在、日展会員、日本現代工芸美術家協会会員、石川県美術文化協会評議審査員、加賀染振興協会理事を務めるほか、県内の教育機関の非常勤講師として後進の指導にあたる。「加賀繍と加賀友禅が今後二つの流れとしてさらに発展していくことを望みます」。

七尾市青柏祭のでか山「前幕」の復元

加賀刺繍協同組合では、七尾市の青柏祭の主役「でか山(曳山)」の正面を飾る「前幕」の復元に取り組んでいます。前幕は昭和二十七年に作られたもので、縦一・八メートル、幅五・五メートル。装束を着た二匹の猿が鈴や扇を手にして舞っている姿が刺繍されていますが、装束の色が落ち、生地のいたみや破れ、刺繍のほつれが目立っており、七尾市の依頼を受けた加賀刺繍協同組合は加賀友禅の協力を得て修復を進めています。復元された前幕は平成十六年の青柏祭ででか山を飾るほか、「山車祭サミット」でも披露される予定。先代の職人の手による作品が、今輝きを取り戻す事で、石川の伝統技術が次の時代へと伝えられようとしています。

資料提供:青柏祭でか山保存会

加賀繍と加賀友禅の出会いが生む、新たな工芸の世界。

希少伝統工芸

琴 Koto

芸どころ金沢に息づく音の文化

藩政期から武家女性の教養のひとつとして重視された琴。金沢では現在も伝統的な技法で琴の製作が行われています。

琴づくりは桐の原木を木割りして「荒甲」を仕上げることから始まります。荒甲は歪目（もくめ）が細かく整っているほど珍重されます。琴の音色を決めるのは、次のくり貫き工程。くり方で音色が変わるため、熟練の職人が経験と工夫をこらします。その後、表面をコテで焼き、象牙細工や蒔絵など装飾を施します。

琴の魅力は、楽器としての音の美しさに加え、心を込めた手仕事が生み出す、フォルムの優雅さにあると言えるでしょう。

野田 正明作「象牙二重巻琴（柾目）」

匠の技

野田 正明 氏
のだ まさあき

金沢駅近く、別院通りにある「琴三弦 野田屋」の三代目。大学時代に調弦を学び、卒業後本格的な琴の製作に取り組む。店舗近くの工房で、甲のくり貫き、焼き、装飾、調弦までの工程を一貫して行う。「琴を演奏される人の感想や助言を反映させて、さらに良いものを作っていきたい」。

雄大にそびえる山のふもとに広がる
雲海をデザイン化して表現。
中川 衛作 象嵌花器「雲海」

心を込め、手作業によって作られた琴からは、
作り手と弾き手の心が聞こえてくる。

象嵌 Zougan

今を彩る、百万石の装飾美。

天下泰平の江戸時代は、鎧や兜、刀などの武具も実用性より装飾性が重んじられた時代。加賀象嵌はこうした時代を背景に発達した彫金技術で、鉄・銅などの地金表面にたがねで模様を彫り、金・銀など異種類の金属の嵌め込んでいくものです。色彩の異なる金属を重ねた華麗な「鎧象嵌」に特色があり、象嵌部分が容易に脱落しない堅牢な平象嵌の技法として知られています。かつて武士の装いを彩った繊細な技は、今やアクセサリーやステーショナリー、インテリア小物を飾り、あるいは地金を壁材とした壁面装飾となり、現代の暮らしを彩っています。

中川 衛作「四季の譜（うた）」
（金沢市立泉野図書館所蔵 ／撮影協力：金沢市）

匠の技

中川 衛 氏
なかがわ まもる

金沢美術工芸大学卒業後、江戸時代の名品「金銀象嵌水引の図鐙」に出会ったことから、二十九歳で加賀象嵌の高橋介州氏の門を叩く。平成十五年は日本伝統工芸展五十年記念展「わざの美」に出展した他、日本伝統工芸展日本工芸会保持者賞受賞、北国文化賞受賞など活躍。金沢美術工芸大学教授を務めて後進の育成にも尽力している。

中川 衛作 象嵌花器「雲海」

左：中川 衛作 象嵌花器「木菟（みみずく）」
右：中川 衛作 金銀象嵌「カワセミ」

金沢伝統工芸ショップガイド

お気に入りの逸品を選ぶ時間をゆっくり、楽しむ。
旅の折に訪れたい、伝統工芸のショップガイド。

加賀友禅

協同組合加賀染振興協会

1 協同組合加賀染振興協会
〒920-0932 金沢市小将町8-8
☎076-224-5511
http://www.kagayuzen.or.jp/

金沢九谷

金沢九谷振興協同組合

2 片岡光山堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-1
☎076-221-1291
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=151&cald=&calm=w&mll=35

3 鏑木商舗
〒920-0855 金沢市武蔵町1-13
☎076-221-6666
http://www.kaburaki.jp/

4 九谷巴商会
〒920-0936 金沢市兼六町2-13
☎076-231-0474
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=146&cald=&calm=w&mll=35

5 九谷焼長寿堂
〒920-0961 金沢市香林坊2-4-5
☎076-221-1822
http://www.chojudo.com/

6 九谷焼諸江屋
〒920-0981 金沢市片町1-3-22
☎076-263-7331
http://www.moroeya.com/

7 黒龍堂
〒920-0853 金沢市本町1-5-3 リファーレ1F
☎076-221-2039
http://www.kokuryudo.com/

8 順風堂
〒920-0904 金沢市下近江町40
☎076-231-2700
http://www.kanazawa-cci.or.jp/area/shop/3/promote.html

9 野村右園堂
〒920-0936 金沢市兼六町2-3
☎076-231-5234
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=139&cald=&calm=w&mll=35

10 北山堂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-33
☎076-231-5288
http://www.hokusando.co.jp/

11 矢木源山堂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-36
☎076-231-6511
http://www.rakuten.co.jp/genzando/

金沢仏壇

金沢仏壇商工業協同組合

12 (株)池田大佛堂
〒920-0854 金沢市安江町5-7
☎076-222-5550
http://www.kaga-noto.or.jp/Noren01/index1.html

13 池田仏壇店
〒920-0855 金沢市武蔵町5-38
☎076-231-5665

14 ㋑今村佛壇店
〒921-8055 金沢市西金沢新町178-1
☎076-249-1366

15 卯野屋仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町15-44
☎076-263-9570
http://www.shop-kanazawa.jp/shop/unoyabutsudanten

16 金沢仏壇商工業協同組合
〒920-0855 金沢市武蔵町8-2
☎076-223-4914
http://kanazawa-butsudan.or.jp/

17 北村仏壇店
〒921-8851 野々市町本町5-4-7
☎076-248-3362

18 (株)澤田仏壇店
〒920-0854 金沢市安江町3-15
☎076-221-2212
http://www.kanazawa-cci.or.jp/shinise/stores/sawada.html

19 (株)清水仏壇店
〒920-0968 金沢市幸町6-5
☎076-222-2861

20 ㊇竹村仏壇店
〒921-8031 金沢市野町2-6-3
☎076-241-6778 (野町駅前)
http://takemura.ftw.jp/

21 中村仏壇店
〒920-0851 金沢市笠市町1-14
☎076-231-5073

22 ㊒塗師岡仏壇店
〒920-0843 金沢市森山2-1-29
☎076-253-2201

23 ㊙塗師岡仏壇店
〒920-8031 金沢市野町1-2-36
☎076-241-0795
http://www.kanazawa-cci.or.jp/shinise/stores/nushioka.html

24 はやし仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町5-5-17
☎076-241-8690

25 三島仏壇
〒920-0862 金沢市芳斉2-4-2
☎076-221-8015

26 森田仏壇店
〒921-8031 金沢市野町3-2-28
☎076-241-1375
http://shop-kanazawa.jp/shop.php?shp=453&cald=&calm=w&mll=16

27 (有)山田仏具店
〒920-0854 金沢市安江町13-32
☎076-221-2306
http://yamadabutsuguten.co.jp/

28 柚森仏壇店
〒921-8033 金沢市寺町2-11-40
☎076-241-4571

29 (株)米永仏壇
〒920-0058 金沢市示野中町1-10
☎076-221-1930
http://w2223.nsk.ne.jp/~yonenaga/

金箔

石川県箔商工業協同組合

30 (株)今井金箔
〒920-0968 金沢市幸町7-3
☎076-223-8989
http://www.kinpaku.co.jp/

33 金箔工芸 田じま
〒920-0855 金沢市武蔵町11-1・2F
☎076-263-0221
http://www.tajima-kinpaku.co.jp

31 かなざわカタニ
〒920-0902 金沢市尾張町2-16-80
☎076-263-6111
http://www.katani.co.jp/kk/

34 (株)箔一本店 箔巧館
〒921-8061 金沢市森戸2-1-1
☎076-240-0891
http://www.hakuichi.co.jp/

32 (株)金銀箔工芸さくだ
〒920-0831 金沢市東山1-3-27
☎076-251-6777
http://www.success21.com/goldleaf/

35 箔座 本店
〒920-0843 金沢市森山1-30-4
☎076-251-8941
http://www.hakuza.co.jp/

金沢漆器

金沢漆器商工業協同組合

36 赤地漆器店
〒920-0805 金沢市小金町12-2
☎076-252-8939

37 (株)石田漆器店
〒920-0981 金沢市片町1-7-21
☎076-261-2364
http://www3.nsknet.or.jp/~ishida/

38 (株)和幸
〒921-8163 金沢市横川7-43
☎076-247-4455

39 (株)能作
〒920-0962 金沢市広坂1-1-60
☎076-263-8121
http://www.kanazawa.gr.jp/nosaku/

加賀繍

石川県加賀刺繍協同組合

40 小林刺繍舗
〒921-8015 金沢市東力1-130
☎076-291-5150
http://www.kanazawa1.com/kobayashi/

41 ぬいの今井
〒920-0967 金沢市菊川2-10-12
☎076-231-7271
http://www.kanazawa1.com/imai/

42 縫工房 繭鳥（まゆどり）
〒920-0831 金沢市東山1-26-7
☎076-252-2177 (ひがし茶屋街)

希少伝統工芸

43 金沢・クラフト広坂
〒920-0962 金沢市広坂1-2-24
☎076-265-3320
http://www.hokuriku.ne.jp/hirosaka/

Kanazawa Traditional Arts & Crafts

【ステキバックナンバー】

vol.1 創刊号
[2002 vol.1]平成14年11月発行

vol.2 金沢四季の意匠＜秋編＞
[2003 vol.2]平成15年9月発行

ステキ
Kanazawa Traditional Arts & Crafts

【編集・発行】
金沢工芸普及推進協会
〒920-0962 金沢市広坂1-2-24 TEL076-265-3320 FAX076-265-3321
E-mail:hirosaka@blue.hokuriku.ne.jp http://www.hokuriku.ne.jp/kougei
【編集協力】
石川県加賀刺繍協同組合・石川県箔商工業協同組合・金沢九谷振興協同組合・金沢漆器商工業協同組合
金沢仏壇商工業協同組合・協同組合加賀染振興協会
【取材・撮影協力】金沢市、西田家庭園 玉泉園、壽屋、米永仏壇 【衣裳協力】ブライダルハウスことぶき

[2004 vol.3] 平成16年1月発行